時の魔女

千咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の魔女

【Ｎコード】

Ｎ３８８６Ｙ

【作者名】

千咲

【あらすじ】

高校２年生の秋、帰国子女の転校生、時雨ユリア（しぐれゆりあ）がクラスにやってきた。ユリアのことが気になってつきまとっていた日高司（ひだかつかさ）は、ある日、ユリアに問いただしてみたところ、彼女が呟いた言葉は司の幼い頃からお気に入りの絵本のタイトルだった。絵本から始まる恋愛ファンタジー。たくさんの人々の想いを抱え、司とユリアが伝説の魔女を救済するお話。女性向けです。

1話　時の魔女

昔々、
時の魔女と呼ばれる美しい魔女がいました。

時の魔女は全てのものの時間を持っていました。人、動物、植物…全ての時間を知り、手にしていたのです。

時の魔女を人間たちは忌み嫌いました。自分たちの持っていないものを持っていたので、恐れたのです。時の魔女は人間たちの前に姿を現さず、一人、深い森に棲んでいました。人間たちのためでした。

そんな時、まだ人間たちが争いをしていた頃。人魚の森に棲む人魚たちが人間を滅ぼそうと企みました。時の魔女はｓの企みを知り、人間を守りました。時の魔女はとても心のやさしい魔女だったのです。

その時、時の魔女は人魚の呪いを受けました。

人間たちは時の魔女にとても感謝しました。そして、時の魔女を人

間たちの棲む村に棲もうと誘いました。しかし、時の魔女はその誘いを断り、人魚たちのいなくなった人魚の森に棲むことにしました。

それから、何百年も時は過ぎ、時の魔女はある日一人の人間に恋をしました。二人は愛し合っていましたが、二人は結ばれることはありませんでした。時の魔女が人魚から受けた呪いは、人を愛すると永遠の眠りについてしまう呪いだったのです。

時の魔女は大切な宝物を人間たちに託して眠りにつきました。

深い深い、人魚の森にある湖の底で。

2話　チョコレートの依存性

まだ、夏の暑さを残した9月。司(つかさ)は昼休みを利用し、学校内の図書室を訪れていた。

司は読書をするタイプではあるが、今回、図書室を訪れた理由は他にある。

迷いなく本棚の間を潜り抜けやってきた場所は、入り口からだいぶ遠い位置にある日本の神話の本が集められたコーナー。本好きの生徒でも、さすがにこのコーナーに近づく者など本当に極わずかの物好きしかいない。

そんな極わずかの物好きが、一人。今、学校内で噂の的であある生徒、時雨(しぐれ)ユリアだ。彼女こそが司がこんな物好きしかこない場所に訪れさせた理由だった。

司は彼女の姿を視界に捕らえ、いたずらを企む子供のような笑みを浮かべた。効果音をつけるならニヤリがベストであろう。

「時雨さん。」

司はその笑みをすぐ消し去り、人当たりの良い笑みに張り替える。

彼女が噂の的になっている理由にはいくつか理由がある。時雨ユリアは2学期に入り、イギリスから司のクラスに転入して来た帰国子

女だった。帰国子女の転入生というだけでもかなり噂になる要素だというのに、更に時雨ユリアは美少女だった。腰まで伸びる綺麗で真っすぐな黒髪に蜂蜜色の大きな瞳、背は低く小柄であるが手足が長く、華奢である。どこか日本人離れした顔つきの彼女はたぶん、ヨーロッパ系のハーフなのであろうと司は予想している。そういうわけで、帰国子女の転入生の美少女である時雨ユリアは学校内で有名人となっていたのだ。

時雨ユリアは腰まで伸びている真っすぐな黒髪をさらりと揺らし、振り返った。ちょっとした動作でも気品さが伺えた。

「日高(ひだか)くん…何か用？」

凛とした綺麗な声がほのかに赤い唇から紡がれる。日高というのは司の苗字だ。

「何か探し物？」

時雨ユリアはどこか、司と似ていた。容姿や性格ではなく、雰囲気、と言えば良いのだろうか。司にも理由がよくわからない。強いて言えば、仮面のような笑顔と周りに一線引いて付き合っているところだろうか。休み時間はほとんどこの図書室に閉じこもり、何かを探している時雨ユリア。そんな彼女が、司はずっと気になっていたのだ。

「……まあ、ね。」

ユリアは自分よりも頭一つ分以上高い司からツイッと視線を逸らしながら曖昧に言う。

「よかったら手伝うよ。」

そんなユリアを司は逃がす気がない。やっと捕まえたのだ。以前から司からユリアに接触しに行ったことはあったのだが、あの笑顔にのらりくらりと交わされてしまっていた。教室での接触だったせいもあるが。だが今回は二人きり。ユリアに逃げ道など作らせる気など全くなかった。

「遠慮しとく。日高くんの時間なくなっちゃうでしょ。」

ほら、また。ユリアは逃げようとする。ユリアもユリアで、司が最近自分につきまとってくることに警戒していた。

やんわりと笑顔で流されたように見えるが瞳の奥は笑っていない。どうやらユリアは司に教える気も、仲良くなる気もさらさら無いようである。でも、やっと捕まえたのだ。

司はユリアにグッと近づき、棚に手をついて彼女を腕と腕の間に閉じ込める。逃げ道など作ってやらない。司の鼻孔をチョコレートの甘い香りがくすぐり、クラリと目眩がした。もちろんそれは、腕の

中に閉じ込めたユリアから香るものだ。

「……何のつもり？」

「別に。ただ君が気になるだけさ。」

司は吐息交じりにユリアの耳元で囁いた。ユリアはくすぐったそうに身をよじる。しかし、全然余裕そうな表情で司を蜂蜜色の瞳で見つめる。

「へぇ、日高くんてそういう性格なんだ。」

スッとユリアの瞳が細められる。あからさまな嫌悪。初めて見る、彼女の表情だった。

司は元々、温厚で人当たりがよく、先生からも生徒からも人気があった。特に女子。司はすらりと背が高く、中性的な綺麗な顔立ちをしていた。一見、体の線が細いようにも見えるが、常日頃陸上部で鍛えているため、服の下には見事な肉体美が隠されている。しかも、司は陸上部のエースだ。これだけ条件の揃った男を女子が放っておくはずがなかった。

お互い視線を逸らさず見つめ合う。否、見つめ合うというよりはにらみ合っていた。二人とも互いに腹の探り合っている。

そして、司はぴくりと眉間をひくつかせた。おかしい。普段なら相手の心の内を読むなど容易いことだというのに。司は一般人と少し

変わった特技があり、読心術が使えた。どんな人間でも心の内を読むことができた。なのに、ユリアの心の内が読めない。全く。司は動揺した。

そんな司にユリアは一瞬瞳を大きく見開いた後、今度は楽しそうに目を細めた。その表情は正しく妖艶と呼ぶにふさわしかった。ドキリと司の胸が高鳴る。

「それ、あたしには通用しないよ。」
「…どういう意味？」
「さあ？」

ユリアは司に不敵に笑って見せた。小さな苛立ちが募る司。こんな敗北感を味わうのはなんだか久しぶりな気がした。

「てかさ、どいてくれない？もう授業始まるし。」

ユリアは嫌悪感を隠しもせず、司を押し退けた。

「待って。」

すかさず司は逃げようとするユリアの手首を掴む。ユリアの手首は少し力を入れれば折れてしまいそうな程に細かった。司は少し不安になる。

「なに？」

司はユリアの手首を強引に自分の方へ引っ張る。突然引っ張られ、ユリアは驚きながら司の胸に飛び込んだ。司はゆっくりとユリアの耳元に唇を寄せた。

「俺、君のこと気に入っちゃった。これから仲良くしてね、ユリア。」

そして、最後にユリアの額に口づけを一つ落とす。

ユリアは顔を真っ赤にして走り去ってしまった。

司は逃げていってしまったユリアの小さい背中を笑みを浮かべながら見送る。普段は仮面を被っているが、その内側は強気でどこか余裕があるように見えて結構初なユリア。可愛い一面を見たな、と司は思った。

携帯の画面を見れば後数分で授業が始まる時刻を表示していた。司はユリアの残り香りを吸い込み、彼女のチョコレートの香りは、確かに依存性がある、なんて少し馬鹿なことを考えながら上機嫌で教室へと戻っていった。

3話　魔女と魔法と伝説の人

ユリアは一人、学校の図書室にて奮闘していた。埃とカビの匂いにはもうとっくに慣れた。

彼女がいるのは図書室内でも一番人気のない場所。日本の神話コーナーだ。北欧神話やギリシャ神話は好きという生徒が多いが、日本の神話コーナー付近はガランとしていて人一人いない。そんな場所にユリアが通いつめているのには勿論理由があった。

”時の魔女”

それが、ユリアの探し求めている唯一のキーワードだった。

ユリアには両親がいない。両親が現在生きているかすらわからない。ユリアが物心ついた時には、孤児院にいたのだ。ユリアが孤児院の先生に両親の事を聞いても、皆、首を横に振るばかり。誰も、ユリアの両親の存在を知る者は一人もいなかった。

今から17年前、孤児院の入り口に一つのゆりかごが置かれていた。その中には一人の赤ん坊と一通の手紙が入っていた。手紙の中には”ユリア”と”時の魔女”とだけ記されていた。赤ん坊はまぎれも無くユリアであり、その時の魔女というキーワードだけが、ユリアにとって両親の唯一の手掛かりなのだ。

幼い頃からどこか大人びていたユリアは魔女の存在を否定していた。魔女だなんて、所詮空想に過ぎないであろうと思っていたのだ。

しかし、ある日からその考えが変わった。

ユリアが魔女であったからだ。

ユリアたちの存在する世界には普通の人間と、もう一つ、魔法族という種族が存在した。魔法族は普通の人間たちに見つからぬようにひっそりと生きてきた。大昔に人間に見つかった魔法族の者が次々と殺される事件があったからだ。それがあったため、魔法族たちは人間たちに見つからぬように魔法族たちだけの住処を作った。その、魔法族たちが拠点にしているのがフランス。フランスは、魔法族が生まれた場所だ。そのフランスに、魔法使い、魔女見習いたちが通う学校がある。ユリアはその学校から入学許可証が届いた。それで、ユリアは自分が魔女だということを知ったのだ。

自分が魔女だと知り、ユリアは時の魔女は実際にいる人物ではないかと思った。孤児院を離れるのは寂しく思ったが、ユリアはどうしても知りたかった。その目で確認したかった。自分の両親を。

ユリアは必死に語学を学んだ。なにせ、ユリアは生まれてからずっと日本暮らし。学校ではフランス語ではなく英語が主だったのが唯一の救いだった。

金銭面が不安だったが、校長と話し合いをして奨学金を借りて通うことに決めた。長期休みには学校の雑用のバイトをして学費を稼いだ。

魔法族の学校に在学中はひたすら勉強と雑用と時の魔女の調査に明

け暮れる日々だった。

魔法族の学校なのだから、時の魔女に関しての資料が絶対あると思って意気込んでいたユリアだったが、時の魔女の資料が全くと言っていい程見つからなかった。時の魔女は伝説の人だったのだ。

校内にある大きな図書館だけではなく、街中にひっそりと人間たちの目には見えないようにカモフラージュの魔法をかけた書店や古本屋も探してみた。時の魔女の名前が出てくる本はどれもこれも「時の魔女は不老不死だ。」とか「時の魔女は世界を作った。」とか「時の魔女は誰彼構わず人間を殺す。」など確証のない話ばかりが綴られている。そして、時の魔女だけに視点を置いた資料自体無かったのだ。

ユリアが時の魔女の調査を諦めかけたある日のことだ。その日は、学校の近くにある少し妖しい隠れカフェにユリアは赴いていた。そのカフェを利用する者は皆、魔法族ばかり。ユリアは隅っこで今まで探してきた時の魔女の情報を纏めていた。すると、隣の席にいた日本人女性がユリアに話かけてきた。

「随分熱心ね。」

「はい。」

「時の魔女？」

穏やかな口調だった。ユリアは目を丸くする。学校の先生ですら、時の魔女のことを知ってる人などほとんどいなかったのに、彼女の

口から飛び出してきた言葉はごく自然だったからだ。

「ご存知ですか？」

「ええ。知ってるわよ。」

「時の魔女のこと、知ってる方なかなかいないのでビックリです…。」

「そうね。伝説の人だものね。…時の魔女のゆかりの地があることは知ってるかしら？」

「え！？」

思わずユリアは席を立ち上がった。店内にガタンと大きな音が響き、ユリアは恥ずかしくなる。すごすごとユリアはまた座った。

「どういうことですか？」

「そのままの意味よ。日本の神奈川県にあるんだけど、そこに時の魔女のゆかりの地があるって噂を聞いたことがあるの。」

「日本の…神奈川……。」

ユリアは呆然とした。時の魔女というぐらいなのだからユリアは絶対魔法族のたくさんいるフランスに情報があるのだと思い込んでい

たのだ。しかし、彼女の話によれば日本の神奈川がゆかりの地と言う。まさか自分の故郷にそんな場所があるなんて思いもしなかったのだ。

そんなわけでユリアは魔法学校を卒業後、日本の神奈川にある今の高校に転入した。ユリアの通う高校はちょうどユリアに時の魔女のゆかりの地がある地域にある場所だった。

ユリアは孤児院には戻らず、高校の近くにあるボロアパートを借り、古本屋でバイトをしながら形勢を立てている。言わずもがお金なんてない。学費も払える状態ではないので、帰国子女特典を活かして特待生として転入した。ユリアの通う高校は古い学校なのでたくさん資料があると考え、あまり金銭面のことは考えないことにしたのだ。

無事、ユリアは高校に転入してきたのだがフランス以上に時の魔女の資料がない。あるのはなぜか人魚の資料ばかりだ。神奈川は人魚のゆかりの地でもあったのだ。ユリアの通う高校の図書館は広いので、どこかに資料はあると思うのだが、いかんせんどこを探しても人魚人魚人魚人魚。

ユリアは大きく溜息を吐きながら髪の毛をかきむしった。

「（どうして、ないの…？）」

あの女性が言っていた情報はガセだったのだろうか？そんなことを

考えてしまう。フランスでさえ時の魔女の資料がなかったのだから
そりゃあ情報がガセだというのは有り得る話だ。

ユリアは嫌な想像を振り払うように頭を振った。

そして、目の前にある人魚の資料をぱらりと1ページ捲った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3886y/

時の魔女

2011年11月20日18時37分発行